

選択体系機能言語学における finiteness に関して

——日英語比較対照の観点から——

龍 城 正 明

I はじめに

言語が持つ諸機能の中で、話し手と聞き手の関係を担う機能は「対人的機能」と呼ばれ、ここでは話し手の心理的状态を表しているとする modalities も含め、話し手の聞き手に対する態度表明を表す機能が扱われる。これは節¹においては、finite と呼ばれる要素で具現されるとするが、これには時制、法制、極性などが含むとされるので、話し手にとっては最も重要な要素とすることができる。特に英語の場合は、時制、法制、極性などの重要な標識が、一つの要素、即ち、一語によって具現されることから、finite と呼ばれる概念は、大変重要であると同時に、英語の構造分析の観点からも大変強力な分析法であるといえる。

本論ではこのような意義をもつ finite と呼ばれる概念を明らかにし、かつそれが具現される要素について、日英語対照という観点にたつて考察を試みることにする。即ち、この要素は英語では一語ではあるが、日本語の場合はどうのように具現するのか、その結果、これをどのように捉えるのが最適であるかについて考察を試みる。そこで、まず英語における finite と呼ばれる概念がどのように捉えられてきたかを選択体系機能言語学の創始者である Halliday の定義を始めとして、最近の選択体系機能言語学者により唱えられている諸定義を紹介することによって比較検討していく。次に、それらが日本語の分析にどの程度有効であるか、またどのような修正を加えるべきかを見ていくことにする。その結果、finite element を含む finiteness という概念

を日本語で考える場合、日本語の術語としてはどのように呼ぶのが適切なのかについても考察していくことにする。

II finite の定義の変遷

まず Halliday の finite に関する定義を見てみよう²

- (1) 1. The finite element, as its name implies, has the function of making the proposition finite. That is to say, it circumscribes it; **it brings the proposition down to earth**, so that it is something that can be argued about. A good way to make something arguable is to give it a point of reference in the here and now; and this is what the Finite does. **It relates the proposition to its context in the speech event.**
2. Finiteness is thus expressed by means of **a verbal operator which is either temporal or modal.**
3. But there is one further feature which is an essential concomitant of finiteness, and that is **POLARITY. This is the choice between positive and negative.**
4. Finiteness combines the specification of polarity with the specification of either **temporal or modal reference to the speech event.** It constitutes the verbal component in the Mood.

Halliday が挙げている finite の定義としては下線付き太字で示した部分で、それは以下のように、まとめることができる。

- (2) 1. 命題を具体化する。言い換えれば、finite とは言語行為においてコンテキストに対する「命題」との関係に関わっている部分である。
2. 時制もしくは法制を担う動詞オペレータ³である。

3. 極性, 即ち肯定か否定かを選択する。
4. ムードにおける動詞構成素から成ることから, 話し手の内容に関する時制, 法制を担う

(2) でみた Halliday の定義を基本として, その後様々な観点から finite に対する定義が試みられているので, それらを年代順に見ていくことにしたい。まず, Eggins は finite の機能に着目し, finite とは “to ‘anchor’ the proposition” であるといい, 極性への言及とともに, 次のように述べている。

- (3) 1. The function of Finite is to “anchor” the proposition, to bring it down to earth so we can argue about it.
2. Polarity is always present in the Finite, even though it does not appear as a separate element when polarity is positive.

その後 Eggins は Slade との共著で,

- (4) The Finite expresses the process part of the clause that makes it possible to argue about the Subject participant.⁵

であると, 過程構成の観点から節内における過程と密接な関係をもつ参与要素としての, 主たる参与要素との関係に言及している。

さて, 次の Bloor, T and M.Bloor では finite を文法的な観点から捉え, finite とは verbal group の一部であるとし, finite が担う機能は動詞における数や人称の一致 (agreement) であるとし, 従来の伝統文法の解釈に非常に近い⁶。しかし, finite auxiliary verb, finite of a copular verb という表現の中に, 機能的な捉え方が見えるのは, 従来の捉え方からは一歩進んだ分析といえる。というのも, 伝統文法の枠組みでは助動詞を「定型」という範疇では捉えていな

い。

- (5) 1. The Finite is that a part of the Verbal Group which carries the agreement(person and number), in so far as it shows up at all in English the Predicator is the remainder of the Verbal Group.⁷
2. A function at the rank of clause(the others being Subject, Predicator, Complement, Adjunct). Interacts with Subject in the Mood part of the clause. Preceeds Predicator in an unmarked declarative clause and may be fused with Predicator in a one-word Verbal Group. When not fused, it is realized by a modal, a finite auxiliary verb, finite of a copular verb (e.g., *is, seemed, became*) or finite of *have*.⁸

Bloor の1年後に Thompson は (6) に見るように, verbal operator としての finite が時制と法制という2つのグループからなることに重きをおいている点は注意すべきである。

- (6) The Finite is drawn from a small number of verbal operators. These can be divided into two main groups: Those which express tense ('be', 'have' and 'do', plus 'be' as the marker of passive voice) and those which express modality ('can', 'may', 'could', 'might', 'must', 'will', 'would', 'shall', 'should', 'ought to'). 'Will' and 'would' can be included in the tense as well as the modality group, because of their particular uses in signaling the future.⁹

また, 命題との関連については以下に見られるように「命題の妥当性」について述べている。

- (7) ... the Finite makes it possible to negotiate about the validity of the

proposition. We can see the Subject as non-negotiable as long as the current proposition remains in play. Through the Finite, the speaker signals three basic kinds of ‘claims’ about the validity of the proposition, each of which in principle is open to confirmation or rejection by the listener.¹⁰

さらに、時制と法制に関しては、speech event と speaker’s attitude との関係で捉え、それらと modal operator との関連で、operator は基本的には現在時制であるので、時制は通常中和されるとし、modal operator とは話し手が言語行為を行なう時点での態度であるとする。

- (8) The Finite relates the proposition either to the here-and-now reality of the speech event (tense) or to the speaker’s attitude (modality). This implies that tense and modality were alternative points of reference; but in fact it would be truer to say that, with a modal operator, tense is normally neutralised because the operator is inherently present tense. In most cases, a modal operator expresses the speaker’s attitude at the time of speaking.¹¹

ここで最近出版され、それも Halliday の直接の薫陶を受けて研究を行っているオーストラリア・シドニーの研究グループの定義を見てみよう。これはその書名も *Working with Functional Grammar* と題され、ともすれば難解であると言われる Halliday の IFG の解説書としての役目をも果たす著作であり、Jim Martin, Christian Matthiessen, Clair Painter という最も精力的に選択体系機能文法を研究しているグループによるものである。この3人 Martin, Matthiessen, and Painter によれば、finite とは

- (9) The Finite makes a clause negotiable by coding it as positive or negative and by grounding it, either in terms of time (*it is/it isn’t: it was/it wasn’t: it*

will/it won't) or in terms of modality (*it may/it will/it must. etc.*)¹²

と、HallidayのIFGでの定義を簡潔にまとめた内容となっている。即ち、finiteの説明に対して、命題に関してこそ言及はないが、「極性と具体性」を持たせることにより、話し手は、聞き手に対してその内容について「話し合う・交渉する」ことが可能であり、それは時制と法制という観点からなされると言うのである。

以上様々な先行研究を通して finite についてみてきたが、次節では finite についての定義をまとめ、その結果、日本語への適用という観点から finite について考察することにしたい。

Ⅲ finite についての考察 日英語対照の見地から

本論では finite を以下のように定義することとする。

- (10) 1. 命題を具体化し、確定する
2. 極性を具現する。
3. 時制・法制を個別に、あるいは同時に具現する。
4. 極性をその位置関係から具現することになるので、オペレータという概念を導入することが可能である。
5. 動詞群の最初に位置する単一要素である。

以上の性質をもつ finite の定義をうけて、本論では finite を「命題定型」と呼ぶことにする。しかし、(10)に挙げた命題定型に関する定義は、偏に英語に適用されるもので、世界の言語に普遍的に適用できる定義ではないことに留意すべきである。そこで、この定義に関する項目について順を追って、見ていくことにしよう。

まず、(10-1)「命題を具体化し、確定する」については、このように「命

題」を担う機能をもつ要素が「命題定型」である、とすることから始めなければならないであろう。というのも、これ以外の項目をも「命題定型」の必須条件とするならば、以下の項目は言語普遍的に適用される項目ではないからである。特に (10-5) にあるように、「命題定型」という機能を担うのは「単一要素に限る」と定義されるならば、日本語ではこの finite という概念自体を否定することになる。これについては後述することにするが、ここではまず、finite とは「命題を担う要素」を基本条件とする。次に (10-2) の極性についてはどうであろうか。英語の場合は *isn't*, *hasn't*, *shouldn't* の *n't* 形と *not* という単一の形態素として具現するが、何れの場合も動詞群に含まれる要素であり、節の要素ではないとされる¹³。したがって、縮約形の場合は動詞の一部として具現することから、「肯定」か「否定」を担う極性は「命題定型」の中に自ずと含まれるのである。しかし、日本語の場合は以下に見るように、常に動詞群の一部であるとは限らない。

- (11) a. 春夫にそんな必要はない。
 b. 夏江はピアノを引いていた様子はない。
 c. 秋彦は何の期待もしていなかった。
 d. 冬子はこのところずっと映画にいったことがなかった。

(11a,b) は現在形であるが、(11c,d) は過去形となっている。その際、時制を担っているのが否定辞「ない」であるが、これは従来の日本語文法では形容詞として分類されている要素である。もちろん、日本語には英語 *n't* のような動詞との縮約形としての具現はない。したがって、日本語の分析では「ない」は動詞群の一部として捉えることには無理がある、ということになる。この点からも極性を担う機能が動詞群の一部として捉えられ、それゆえ「命題定型」が具現される際に、常に極性を包含する単一形であるとは言い難い。

(10-3) に関しての時制・法制についてはどうであろうか。英語の場合は時制・法制は単一の要素によって具現することが可能である。たとえば, *is:was*, *love:loved*, では命題を担う要素が共に時制をも担っている。また *may:might*, *shall:should*, では時制と法制が同時に具現されることになる。さらに, 未来形の場合は *will, shall* という助動詞が時制を担う要素として単一で機能することになる。これに対して, 日本語の場合は以下に見るように日本語の膠着性という性質から, 時制・法制は様々な形態をもって基本動詞に付加されて具現していくことになる。

- (12) a. 春子は先週から神戸に来ているはずであった。
 b. 夏夫がこの問題について考えるべきであった。

これは英語では (13a,b) となるであろう。

- (13) a. Haruko might have been in Kobe since previous week.
 b. Natsuo should have considered this problem.

ここでの問題点は日本語が「来ているはずであった」や「考えるべきであった」という動詞群において, 主動詞・時制・法制を表す要素において, 何を「命題定型」の基本的な要素として捉えるべきかという点である。すなわち時制・法制を表す要素を, 単一の要素として捉えることができるのかという点である。(12a)の命題定型「ている+はず+であった」では, 時制は相を含む「ている」に, 法制は「はず」に, さらにこの法制の時制が「であった」として具現されている。同様に, (12b)の命題定型「るべきであった」は「る+べき+であった」と時制は「る」と法制は「べき」で, その法制の時制が「であった」となり, 異なった要素として具現する。特に時制は本動詞と助動詞の2つに具現することとなる。すると, ここでの「命題定型」に

は何を主要素となすべきかという疑問が挙げられる。この点についても、英語では *might, should* を伴う節における本動詞は過程を担う役割のみで、これには時制の関与はない。したがってこの場合は「原形」という指定を受ける。そこで、命題定型を担う *might, should* は時制と法制とを併せ持ち、さらに上述のように *mightn't, shouldn't* のような形態を考えると、極性をも併せ持つて具現することが可能となる。この点に関しても、日本語の統語構造は英語とはかなり異なる構造を持つといえる。

次に(10-4)に挙げられているオペレータという概念について見ていくことにしよう。オペレータとはその対象となるものに対し、その値を変化させる機能を備えたもので、それは「正」から「負」へ、またはその逆への変換を意味するが、ここでは、肯定文と否定文との変換に関してその作業を担う要素である、と考えると分かりやすい。

これについては以下の具体例を見てみよう。

- (14) a. Margaret swims in the pool.
 b. Margaret is swimming in the pool.
 c. Margaret has been swimming in the pool.

(14a,b,c) は、文法的には「肯定文」として捉えられたものであるが、これは機能的に捉えると、話し手が聞き手に対して「情報授与者 (Information giver)」としての役割を果たしていることになる。次に、これを「疑問文」に変換してみよう。

- (15) a. Does Margaret swim in the pool?.
 b. Is Margaret swimming in the pool?
 c. Has Margaret been swimming in the pool?

(15a,b,c) は機能的観点から捉えると、話し手が聞き手から情報を得ようとしていることから、話し手は聞き手に対して「情報探求者 (Information seeker)」としての役割を果たすことに成る。そこで、この「情報授与」と「情報探求」という2つの機能を担っているのが何かを見ると、これは *does, is, has* という要素であることがわかる。これら3つの要素を仮にFとすると、(14a,b,c) では *Margaret* という S と F の関係は S:F になるが、(15a,b,c) では F:S という関係に成る。すなわち、F という要素がその位置を変化させることにより、「情報授与」と「情報探求」という2つの機能を担っていることになる。このように、その位置を変化させることにより、異なった2つの機能を担う重要な役割をする要素（ここではF）をオペレータと呼ぶのである。では日本語の場合はどうであろうか。

- (16) a. M がプールで泳ぐ。
 b. M がプールで泳いでいる。
 c. M がずっとプールで泳いでいる。
- (17) a. M がプールで泳ぎますか。
 b. M がプールで泳いでいますか。
 c. M がずっとプールで泳いでいますか。

(16,17) で見るように、日本語では英語のようにある要素の位置が変化することにより「情報授与」と「情報探求」という機能が変化するのではなく、「か」という疑問助詞が付加するか否かによって、この2つの機能が決定されるのである。以上の理由から、日本語にはオペレータという機能はないと言える。したがって、英語でのオペレータという概念は、日本語には適用されないものとする。

最後の(10-5)に関して言えば、「命題定型」が常に「動詞群の一部」として具現しているか否か、また、「単一要素」であるか否かの2点が挙げられる。これについてはすでに(10-2,3)においても触れた点であるが、こと英語に関して言えば、この条件は極めてうまく適用され、それ故、上で見たような finite の定義が生まれるのである。しかし、日本語に関して言えば、日本語は膠着語としての性質をもつが故に、「単一要素」が「命題定型」を具現しているとは言い難い。さらに動詞のみならず、形容詞も「命題定型」の機能を担っていることから、「動詞群の一部」が常に「命題定型」の主たる要素であるとも言い難い。

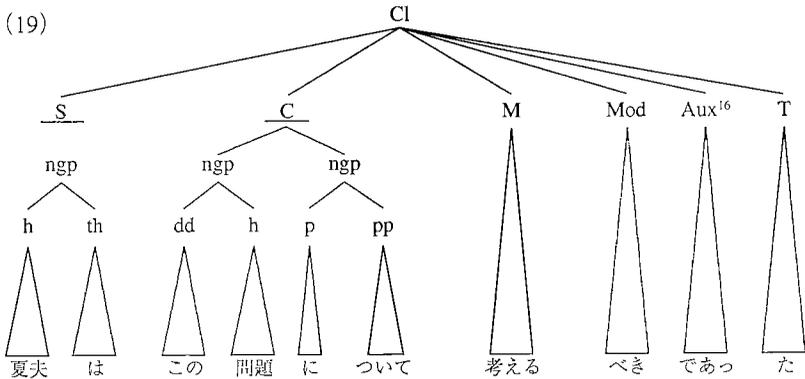
以上の点から「命題定型」に関しては、日英語では以下に示すようなそれぞれが異なった性質をもっていることがわかる。¹⁴

(18)

英 語	日 本 語
1. 単一要素から成る。	複数要素から成る。
2. オペレータとしての機能を持つ。 a. 情報授与者としてのOの機能 SO or SO/X SM or SO/M b. 情報探求者としてのOの機能 OS or O/XS MS or O/MS	オペレータとしての機能はない。 SM or SM/Adj SM/Adj Q E Q,Eの付加による情報探求機能
3. 主動詞 あるいは 助動詞 のみ	主動詞・形容詞のほか、時制・相・法制・疑問助詞・否定辞などが含まれる

この対照表から、日本語の「命題定型」の分析に関して特に留意すべき点は、「命題定型」を形成する要素が複数個存在する点であろう。

したがって、「命題定型群」として、命題定型をひとつの群 = group と捉える分析法があるが、群とすると、動詞群や名詞群の分析に見るように、そこには必ずその中で主要素 = head となる要素が必要とされる。しかし、「命題定型群」においては何が主要素になるかという、それに値する要素の決定は極めて困難である。もっとも、命題定型群には必ず時制を担う要素が必ず具現することから¹⁵、時制をその主要素とすることはひとつの解決法ではある。しかし、これが最適か否かは今少し考慮の余地がある。そこで、群とはせず、「命題定型結合体」として、ひとつの結合体 = cluster として扱う分析法が考えられる。この場合は、複数の同価的要素による要素の結合体 = cluster と分析することで、その妥当性は認められそうである。今一つの分析法は節の直接構成素として捉える方法である。この場合は時制 (= T) ・法制 (= Mod) ・極性 or 否定辞 (= N) ・疑問辞 (= Q) やその他様々な種類の助詞 (= P)、例えば終助詞や詠嘆を表す助詞等は節の直接構成素と分析するので、それぞれが単独に節全体を支配することになる。これは Fawcett を中心とする Wales 大学 Cardiff 校の研究グループによる分析法で、これを日本語分析に応用したモデルは現在筆者が研究中であるが、例えば (12b) の分析は以下のようになる。



Cl = Clause , S= Subject, C= Complement, M = Main Verb, Mod= Modality, Aux=Auxiliary Verb, T=Tense, ngp= noun group, ppg= post positional group, h= head, dd=deictic determinar , th= theme , p=particle, pp=post position

この分析によると、主動詞 (= M) が「過程」を担うが、これに続く Mod, Aux, T などは節の直接構成素であることから、どれが「命題定型」という範疇に相当するのかという割当ての必要はなくなる。命題に関する情報は M で表示される「過程中核部¹⁷⁾」を始めとして、Mod, Aux, T などの要素がそれぞれ具体的にその内容を表示することとなる。したがって、Fawcett の枠組みによれば、「命題定型」という概念は必要ないものとされ、これが Halliday の分析と大きく異なる点である。

IV おわりに

以上、「命題定型」に関して、その概念と分析法を日本語に適用するにはどのように考えるべきかを述べてきた。Fawcett の枠組みは「命題定型」という概念自体を否定するものであり、第Ⅱ節で概観した命題定型の様々な定義とは一線を画する新しい解釈として注目されるべきである。しかし、ここで留意すべきは、Halliday が提唱する「命題定型」という概念そのものを否

定すべきか否かであろう。これについては話し手の意図する命題を具体化する大切な機能を担っているのであるから、言語はなんらかの要素に「命題定型」という概念をもつことになるので、この概念を簡単に否定するか否かの問題については、今しばし時間をかけて考究してみる必要があるように思える。とはいうものの、各言語によって「命題定型」と呼ばれる形態が異なって具現する事実は見逃すべきではない。これは言い換えれば、「命題定型」の記述は各言語によって異なるということになるのである。この点を理解しないと、英語での「命題定型」は単一要素で具現するのに対し、日本語では複数要素で具現するという点のみを捉え、この概念が日本語には適用されないのではないかと誤解を招くことになる。反対に、オペレータという概念は、英語に適用されるが故に、日本語にも必ずその機能を担う要素を設けるべきであるという英語偏重型の分析法になってしまう恐れがある。この点からも「定義」は言語普遍性の法則に則り、唯一の理論的定義とするが、その「記述」、即ち、言語記述という観点からの言語個別分析法は決して無視すべきではないのである。この点を踏まえ、さらなる選択体系機能言語学の枠組みで、言語記述の分析を行うべきであり、その意味では日本語の「命題定型」に関する分析においても今後の研究に待たねばならぬ点が多々あるが、本論が今後の研究の一助になれば幸いである。

注

- 1 選択体系機能言語学における clause と呼ばれる単位。
- 2 Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar* p.75.
- 3 operator と呼ばれる概念については本論の第3章で詳しくみることにする。
- 4 Eggins, S (1994) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* p.159.
- 5 Eggins, S and Slade, D. (1997) *Analysing Casual Conversation* p.77.
- 6 伝統文法では Jespersen などこの finite と呼ばれる術語を用いている。これは人称によってその形態が決定されることからこのように呼ばれる。詳しくは Jespersen, O. (1924) *Philosophy of Grammar* p.87 を参照のこと。
- 7 Bloor, T. and M. Bloor (1995) *The Functional Analysis of English* pp.41-42.

- 8 *ibid.* p.257.
- 9 Thompson G.(1996) *Introducing Functional Grammar* pp.43-44.
- 10 *ibid.* p.45.
- 11 *ibid.* p.58.
- 12 Martin, J. Matthiessen, C. and C. Painter (1997) *Working with Functional Grammar* p.62.
- 13 Halliday, M.A.K. (1992) *IFG* p.88.
- 14 ここで用いる略号としては X=Auxiliary Verb, M=Main Verb, E=Ender があるが, 中でも Ender とは節末にくる種々の記号も含めて節の終端を示すものである。たとえば, 日本語における「君, あした来る?」の?が Ender にあたる。日本語に関しては, Adj=Adjective, Q=Question Marker, などを新しく設けることとする。英語に関しては, Fawcett(1997) “Invitation to Systemic Functional Linguistics: the Cardiff Grammar as an extension and simplification of Halliday’s Systemic Functional Grammar” を参照のこと。
- 15 時制に関しては言えば, 日本語は「過去:非過去」という2分法に分類される言語で, 過去時制は「た」で具現されるが, その他の時制には具体的な形態素はない。しかし, 実際には現在形も形態素としては具現しないが, ゼロフォームとして捉えることは可能であり, またあえて未来時制を設けるなら, 「だろう」をその候補としてあげることができる。したがって, 時制をもたない節構造はないとすると, この時制を「主要素= head」として命題定型群を提唱することは可能である。
- 16 ここでの「である」は助動詞「だ」の変化形と解し, 「であっ」+「た」と分析し, 「で」+「ある」(動詞) とはしない。
- 17 「過程中核部」を含む, 「過程構成= transitivity」に関しては, 拙論「選択体系機能言語学における基本概念と主要術語—transitivity の解釈を中心に」『言語』1997, Vol.26, No.4 を参照のこと。

Synopsis

On the Definition of “Finiteness” : A Contrastive Study of English and Japanese

Masa-aki Tatsuki

According to Halliday, the Finite can be defined as having the function of bringing the proposition down to earth, so that it is something that can be argued about.(Halliday 1994:75). More specifically, if a clause element is to be regarded as the Finite, it must have the following functions. (1) bringing the proposition down to earth, (2) a verbal operator which is either temporal or modal, (3) choosing between positive and negative, i.e., selecting polarity, (4) specification of either temporal or modal reference to the speech event. Based on Halliday’s definition, several studies on the Finite have been made so far, so that some previous studies, such as Eggins(1994), Bloor&Bloor(1995), Thompson(1996), and Martin, Matthiessen &, Painter(1997) are examined for the purpose of comparison. Based on these studies, the concept of the Finite can be summarized as follows:

“The Finite brings the proposition down to earth. Since the Finite in English has either temporal or modal function, the Finite is naturally realized in either the Operator or as a suffix on the Main Verb, and this leads to the fact that the first as well as a single element of the verbal group is the finite.”

This notion, however, does not apply to every language in term of the language universal, since this is considered thoroughly from the viewpoint of English. It thus can be said that this notion does not apply to the Japanese

language. That is, elements expressing either tense or modality appear not only as morphemes in what might be regarded as the verbal group, but also in other elements, including of adjectival groups or as the final particle *ka*, as a Question Marker. Moreover, those elements which carry either tense or modality should not be a single element but several elements, which carry either tense or modality, due to the characteristics of agglutination. Furthermore, a negative morpheme *nai* manifests as an allomorph *nakatta* for a past tense form. This means that the Japanese Negator has its own tense element in contradistinction to English “not”. In this way, Japanese rather displays interestingly different phenomena compared to English. It appears that a different treatment will be needed to describe the Japanese finite system. For this purpose, the difference of the Finite between the English and the Japanese can be analyzed below.

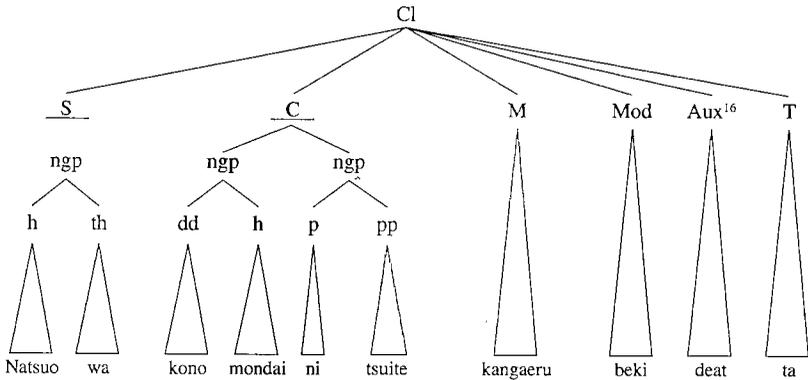
English	Japanese
(1) a single element	multiple elements
(2) functioning as an operator	not functioning as an operator
a. as information giver	
S O or S O/X	S M (Q or E marker is covert)
SM or S O/M	
b. as information seeker	
OS or O/X S	S M Q E (marker is overt)
O/M S or O/X S	
(3) MainVerb or Auxiliary Verb only	Assigned Auxiliary Elements
The first element in the verbal group	Mod, P, E, N, T, A, Q

S=Subject, O=Operator, M=Main Verb, Q=Question Marker,
Mod=Modality, P=Particle, E=Ender, N=Negator, T=Tense, A=Aspect

The above figure clearly illustrates that Japanese does not have a function of OPERATOR. The reason is that Japanese realizes the question, or the function of information seeker, by simply adding the Question Marker *ka*, and not reversing the word order between S and either M or X.

Viewed from this angle, it is necessary to postulate a new treatment of the Finite in order to analyze the Japanese finite system properly. The several possibilities examined in this paper are: (1) treating the Finite element as a group, i.e., a Group Finite, (2) treating the Finite element as a cluster, (3) rejecting the notion of the Finite.

The first one is problematic in determining which element in a Group Finite can be designated as a head, or the main element, since the concept of group, such as nominal group or verbal group should have the head element. The second one seems to be appropriate, since several elements functioning as finite elements can be treated as equal status as far as in the concept of the cluster is concerned. The third one, which is advocated by Fawcett under the name of Cardiff Grammar is that the several elements are treated as immediate constituents of the clause, so that it seems to be well suited to the nature of the Japanese clause structure. The tentative Japanese clause structure is illustrated below.



Natsuo should have considered this problem.

Cl = Clause , S= Subject, C= Complement, M = Main Verb, Mod= Modality, Aux=Auxiliary Verb, T=Tense, ngp= noun group, ppg= post positional group, h= head, dd=deictic determinar , th= theme , p=particle, pp=post position

Natso= boy's name *wa*=thematic particle, *kono*=this, *mondai*=problem, *ni*=particle, *tsuite*=about, *kangaeru*=consider, *beki*=should *deat*=aux, *ta*=past tense

N.B. Although *ni+tsuite* is analyzed two morpheme, this can be considered as one word 'about', and *deat* can be analyzed as an allomorph of auxiliary verb *da*, not a main verb *dearu*=be, so that *deat+ta* can be analyzed as *da(t)+ta* in this paper.

The problem, however, is that, is it reasonable to deny the concept of the Finite or not. As one of the definitions of the Finite goes that the Finite has the

function of bringing the proposition down to earth. This definition seems to be quite powerful in order to analyze the clause structure from the interpersonal metafunction. Consequently, it appears that this problem needs further studies.

The present paper has attempted to show the several new treatments of the finite system of the Japanese language by introducing a new clause structure adopting Fawcett's treatment. At this point in time, however, it is difficult to postulate which one is the most suitable solution regarding the Japanese finite system. The important point is that the definition and the description should be considered separately, otherwise some definitions or theory can be considered as powerless ones, since every language has its own characteristics. The systemic approach has been investigated from the viewpoint of English so far, in other words, not the English definition but language specific description should be considered from the viewpoint of a specific language, such as the Japanese language. In this sense, this paper will be of some help to the further study of the systemic functional linguistics.

Halliday, M.A.K. 1994: *An Introduction to Functional Grammar*

Eggs, S. 1994: *An Introduction to Systemic Functional Linguistics*

Eggs, S and Slade, D. 1997: *Analysing Casual Conversation*

Fawcett, Robin. 1997: "Invitation to Systemic Functional Linguistics: The Cardiff Grammar as an Extension and Simplification of Halliday's Systemic Functional Grammar" *Helicon* Vol.22

Martin, J. Matthiessen, C. and C. Painter 1997: *Working with Functional Grammar*

Thomson, G. 1996: *Introducing Functional Grammar*

Bloor, T. and M. Bloor. 1995: *The Functional Analysis of English*